

トピックス
1. 台湾侵攻
2. 南国土佐を後にして 高知編



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福留 章

龍馬通信

No. 59

2022年11月号

立冬～小雪の候 「歓喜の後の静寂」

10月は秋祭りの季節。播州一円で各神社の秋祭りが繰り広げられる。

天高く青く澄み切った大空を背景に、「紙手（しで）」が舞い、伊達綱が荒々しく揺れる。太鼓の音が時に穏やかに、時に激しく右に左に木霊（こだま）して、男たちの力と力がせめぎあう。渾身の力を込めて「台場差し」。魂を揺さぶる「ヨーイヤサー」。3年ぶりの開催、天候に恵まれ、町々に歓喜の声が満ち溢れた。巡行を終えて男衆の夢は来年の秋に向かう。あんなに燃えた祭りの日々が、あっという間に過ぎ去り、季節は晩秋、霜月の声を聴く。紅葉前線が南下し、カエデやツタは色づいて、山々を染め上げる。早朝にウォーキングする人の息はすでに白い。暦の上では季節は冬。それぞれの秋を感慨深く見送り、冬支度を始める。重ね着の季節。北の国からは「雪囲い」や「雪吊り」の便り。日本人の多くの人が「愛する」秋という季節。去り行く季節に思いを込めて、大きく息を吐く。沈思黙考。老いを恐れ、病を恐れ、死を恐れながら、重ねる日々。予断を許さぬ寒さの冬に向かって、一人よがりのカラ元気。生きるということが、大事なこと。ひとはみな「オギャー」と泣きながら、この世に生まれてくる。流した涙と喜びの日々を、愛しみながら、どうにもならない時の流れに、抗いつつも、あきらめつつも、とにかく生きる。夢を育みながら……。



立冬 11月7日頃
 小雪 11月22日頃

随筆 『龍馬と私』 ～龍馬に学ぶ 龍馬の人的魅力～



龍馬の人的魅力を挙げれば十指に余る。その魅力が龍馬という人間像を当時の日本人から際立たせ、多面性を持たせ、それだけに多角的な立場からの支持者を多く糾合したといえる。幕末という混乱期に龍馬は多くの歴史的偉業を成し遂げた。しかも無い無い尽くしの裸一貫で。そこに龍馬の真骨頂があり、人々は拍手喝さいを惜しまないのである。痛快なのは、当時の藩とか権力者をバックにもたず、言わば無資本、つまり組織とか、資本とか必要資材をほとんど持たずに偉業を達成したことである。その並外れた人的魅力は、まず独創的な人間関係を作り上げたことにある。そして人との出会いを無駄にせず、ことごとく自らの人的魅力に引き入れたということである。勝海舟との出会いはドラマチックであり龍馬の運命を決定づけたともいわれている。千葉重太郎とともに勝海舟を訪ねた龍馬

は、胸に殺意さえ持っていたといわれる。勝の人としての大きさに驚嘆し、それまでの思想を打ち捨てて、勝の門下に入る。そのツテで越前の松平春嶽（写真）や横井小楠との知遇を得る。そして幕府の軍艦奉行である勝のもとで海軍操練所の塾頭となる。松平春嶽は越前福井藩のれっきとした藩主、龍馬は一介の素浪人に過ぎないのに。龍馬は、初対面の人を自分のファンにしてしまう力を身に着けていた。西郷隆盛、大久保利光、高杉晋作、桂小五郎、後藤象二郎、岩崎弥太郎、大久保忠寛、由利公正など、明治維新に名を連ねた多くの人々と交流した。平井加尾、お登勢、おりょう、千葉さな子、お元、坂本家の姉たち。など女性との関りも多彩である。

龍馬の人間の魅力は、百年の歳月を経ても色あせることなく、高知だけでなく、日本全国で、語り継がれている。

播州日誌

台湾侵攻



洪水のような情報が日常的に流れている。私たちにとって、その中から優良で正確な情報だけを選び出すことは、たやすいことではない。私に限って言えば、SNS やユーチューブ、ツイッターには手が出ない。

新聞、TV に頼るしかない。新聞は速報性に欠け、広告収入の割合が高止まりしており、主要広告主の顔色をうかがっている。TV にしても視聴率競争に明け暮れ、一部の良質なニュース番組を除けば、低俗なつまらない内容の番組ばかりだ。

中国共産党大会が終わり、最高指導部が側近で固められ、習近平体制が確固たるものになった。これでは批判勢力の声が届かなくて当たり前だろう。共産党の一党独裁、習近平独裁の中国は不気味だ。習近平は共産党大会の締めくくりに演説の中で、5 年以内に台湾を開放する、武力行使も辞さないと言明した。

すわ、「台湾侵攻」。週刊誌はもとより TV、一般紙もセンセーショナルな論調で、明日にも侵攻があるような報道ぶりである。平気で危機意識をあおっている。国民は、それほど愚かではないけれど、こうも侵攻の二文字が流れると、ついそんな気持ちになる人も多いだろう。一部専門家は冷静だ。「台湾侵攻」は政治的なプロパガンダであり現実的でないと言主張する。理由としてハリネズミのように武装された台湾は堅固な要塞であり、地勢的に

も着上陸する海岸が極めて少ない。三千人規模の機械化部隊を上陸させるには、岩礁など障害物のない幅 2 キロほどの海岸線が必要とされています。台湾本島の海岸線 1139 キロのうち、上陸に適した場所は 10% 強の 120 キロ、14 か所しかない。侵攻にはおよそ 3 倍の戦力が必要であり、現時点での米中の戦力の差は歴然としている。台湾本島に上陸適地がほとんどない、自国の海軍・陸軍に台湾周辺の制海権・制空権を握る能力がない、海上封鎖の能力にも乏しいという状況がある。つまり戦略的にも現実的にもここ数年の台湾侵攻はあり得ないということだ。

情報を見る場合、双方面からみる必要がある。A と B の見方・考え方をきちんと比較してみる必要がある。どちらが数字的に正確か、エビデンスがあるかどうか。SDGs の問題でも、きれいごとの羅列である。17 の目標、169 のターゲットを掲げている。これをよくよく見れば、いくつかの矛盾があり、達成不可能と判断され



るものもある。デジタル時代を生きねばならない私たちは、不断の努力をして、情報の氾濫の中から正しい情報を選び出す能力を身につけなければならない。

2022. 10. 28

良書と悪書

読書の秋。もの思う秋の夜長に読書はびったり。残念ながら晩酌を欠かせない習慣が身につけている私は、早朝か昼間の時間を見計らって読書するのが常である。月間5~6冊、年間に70冊ほどが私の読書量。ジャンルにこだわりがなく、雑学のものが多い。1か月に1~2回本屋さんでブックハンティングする。それが何よりの楽しみだ。電子書籍はほとんど見ない。読んだ気がしない。やはり紙に印刷でないと読む気にならない。

良書、悪書という言い方がある。本は主観によるところが多いから人によってその評価がまちまちになるのは仕方がないと思う。費用対効果というのもある。余りにも大きな活字で、頁数を稼いでいるのが、見え見えの本はまず買わない。難しいことをやさしく、わかりやすく書くのが上道だと言われる。余りにも難解で途中で投げ出す場合もある。例えば村上春樹さんあたりになると、2~3回通読しないと理解できないこともある。良書に巡り合った時の喜びは格別だ。良書が少なくなった今頃はなおさらだ。最近悪書だと感じているのは、中国・韓国・北朝鮮・ロシアに関する本。日本人が喜んで留飲を下げる悪口をだらだらと書いた本。悪口さえ書けば売れるとおもっているらしい。習近平はアホだから、早晚中国は破綻するとか。何を根拠に書いたのだろう。一時期の勢いはないが、中国は世界一の経済力を目指して躍進している。読者を喜ばそうとして、読者におべっかを使うような著者は、読書人にとって迷惑だ。専門家と呼ばれる人の中にも怪しげな人がいる。例えば多くのコロナ

本が出版されたが、結局何を信じたらいいのかというぐらい、主張が混乱している。読者を納得させるためには、テーマに真摯に取り組み、誠意を持って著述にあたるべきだと思う。最近の著作の中で秀逸だと思った1冊を紹介します。

前掲の「台湾侵攻」の参考文献である、小川和久著「戦争のリアル」。

簡潔にして明解、しっかりとしたエビデンス。史上空前の国難といわれる現代の世相を、叱咤激励して、進むべき道を説いている。実に読み応えのある1冊だった。

2022. 10. 31



~南国土佐を後にして~

第4回 「高知編」 憧れの白線

昭和33年(1958年)4月小学校4年生。二葉小学校から潮江東小学校へ転校してから半年を過ぎた。神戸から来たクリーニング屋の坊ちゃんと言われた。学校生活は平穏でいじめも周りにはなく、何とはなしに過ぎていった。ずっと級長だったし週番長にもなった。週1回の全校朝礼の時に台の上に上がって全体に号令するのである。「整列」「気を付け」「礼」など大きな声を出す。もっと大きな声でとよく注意された。当時最も嫌いな授業は音楽。優しい横山先生の授業であったが、私は何か声変わりする前から、大人みたいなガラガラ声で、それを苦にしていた。放課後残されてピアノの前で歌わされたりした。小さな声で歌っていたが「福留君は、そう小さな声で歌いなさい。」「ちゃんと歌えているから自信をもって」と励まされた。

棧橋通り1丁目の家から学校まで20分ぐらい。遅れそうになると高知商業高校の塀を越えてグラウンドを斜めに走り近道をした。当時運動会遠足など行事のあるなしを連絡するのに、屋上に赤旗白旗を挙げて連絡していた。当日の朝天候が怪しいときは、30mほど走って行って旗を見る。「白やったき」「よかったね」といったやり取りがあった。

なんとなく皆から押し上げられて、いい気持の3年間だった。先生からも頼りにされて、色々と頼まれることが多かった。6年生の半年ほどは、下校時(午後5時ごろだったと思う)まで残っていて放送室から蛍の光(レコード)を流し「下校時間となりました、早くおうちに帰りましょう」などとアナウンスした。多くの児童が放課後グラウンドで遊んでいた。結構大変な仕事だったことを覚えているが、まあ良き思い出として残っている。給食の時間は欠食児童(いつも腹をすかしていた。)だったので楽しみな時間であった。ある日担任の中沢先生と目が合ったと思ったら「福留君は食べる姿勢がいい」とか言われて、食パンの端のところを2枚くださった。持って帰って母に手渡したら「草はええ子やね」と言って涙ぐんだ。親に喜んでもらうにはどうしたらいいのかを常に考えていたように思う。貧しい生活の中でも、時々喜びがあり笑いがあり、兄弟姉妹も仲良く、幸せを感じるという程でもないけれど、なんとなく平穏な日々であった。

昭和36年(1961年)3月の私立土佐中学校の受験に失敗した私は、同4月市立潮江中学校に入学。土佐中は道路を挟んで斜め前にあって、通学路が一部重なっていた。土佐中(中高一貫制で土佐高を併設)は当時高知ではエリートコース。男子の制服には袖に1本の白線が入っていた。何となくではあったが潮江中学校の生徒は、その白線に対して劣等感を持っていた。土佐中の連中も何となく上から目線のところがあった。当然戦争が勃発してもおかしくないのだが、まあ戦後間もなくのこともあり、争うこともなく共存していた。

私にしたらず張り受験失敗のこともあり、その2本線をうらやましく思うこともあった。

当時はやったものにフラフープがある。あつという間に全国的な流行となり日本を席卷した。直径1メートル程の輪っかを腰と腹を使ってぐるぐる回すといった簡単な遊び。それでも運動神経今一の私にとっては難しい。休憩時間や放課後は色とりどりのフラフープの花が咲き、楽しげな歓声が広がった。何しろTV受像機がようやく100万台を突破したという時代。娯楽といってもこの程度のことであった。それでも地区の大会などは盛んに開催され、およそ2年はブームが続いた。ラジオ放送を聞くのが楽しみだった時代。野球は巨人、相撲は若乃花。東京タワー完工(333m)当時世界一。東京一大阪間を国鉄の電車特急が6時間50分で走り、シスターボーイと呼ばれた平尾昌晃が、怪しい声で「星は何でも知っている」「ダイアナ」を歌った。白黒画面で月光仮面が目一杯に煙をふかし、活躍した。そんな時代であった。



「鶏頭牛後」私には公立の潮江中学校が似合っていたと思う。

中学校でも1年生の時からすぐに生徒会に入り、2年生では副会長、3年生になると選挙で生徒会長に選ばれた。会長になると入学式や卒業式、学芸会では必ず会長挨拶というのがあった。よく覚えていないが、その時々を何となくこなしていたのだろう。何時のことだろう。そっと父が学校へきて私の挨拶を聞いたことがあった。挨拶を聞いた父が顔をくしゃくしゃにして泣いていたということを後から聞いた。



BM サービス協同組合からのお知らせ

BM サービス協同組合の外国人受入れ第1号となる実習生5名がベトナムから10月3日に入国。大阪で入国後、1か月の研修を終えて、11月4日、配属先の実習実施者(リネンサプライ業)で就業しました。

今後の人手不足の解消の一助として外国人雇用を考えてみませんか。お問い合わせは当事務所まで。